

研究紀要

第12号

令和7年3月

岡山科学技術専門学校

目 次

巻頭言

校長

大月 秀之

1 能登川用水のごみ調査活動

ー海に流れるごみの現状を知るー

食品生命科学科

大熊 英治

2 まちづくりデザインコンペティションの実施について

ー学生と町の人との接点の創出ー

建築工学科

秋山 紘

3 イスラームの基礎知識

ームスリム学生の理解のためにー

日本語学科

太田 和宏

巻 頭 言

校長 大月 秀之

岡山科学技術専門学校は、総合工業系専門学校として昭和 63 年 4 月に開校し、本年度創立 37 周年を迎えた。「技術教育を通じての人間教育」の理念の下、人間性豊かで逞しい人材の育成に努めてきたが、近年は確かな実力を身につけた技術者であれば国籍に関係なく日本企業に就職できることもあり、徐々に留学生が増えてきつつある。

本校工業専門課程においては日本語のみを用いて教育を行っているが、実際に留学生に教えてみると、国民性というか、国ごとの違いがあることに気が付かされる。当たり前と言えば当たり前だが、読解力が高いのは漢字圏の出身者であるし、多言語国の出身者は聞き分ける耳が良いのか聴解力が高く、会話力の上達も早い様に感じている。性格的にも、早とちりや思い込みが強い人が多いとか、自己主張が強いと感じた国もある。宗教上の理由が大きな要因になっていることも多い。もちろん、留学生の性格を国籍の違いだけで説明できるはずもないが、学校としてそれなりに対応事例が増えてきたこともあり、ノウハウの蓄積が進みつつあることを実感している。当校に在籍している留学生のほとんどが日本企業への就職を希望しているので、多様性を尊重しつつ、目的に応じた個人指導を行っていることが高い就職率（内定率 100%）という成果につながっていると自負している。

さて当校では、教職員の資質向上を目的に研究活動の奨励をおこなっているが、この度研究紀要第 12 号の発刊に際し、3 名の教員から投稿いただいた。いずれも学生が参加したもので、教育上としても有意義なものとなっている。授業や分掌の通常業務に忙しい中、執筆された教員には心から感謝したい。

能登川用水のごみ調査活動

－海に流れるごみの現状を知る－

食品生命科学科
大熊 英治

1. はじめに

食品生命科学科では、食品、微生物学などのほか、環境について学習している。環境学習の一つとして2021年度から多くの学生、教職員が利用するJR岡山駅西口から昭和町校舎までの道のごみ回収活動を行っている。そのごみ回収活動を続けていた2023年度、山陽新聞社の企画吉備の環アクション「里海未来へ」に賛同した。これは瀬戸内海のごみを削減する取り組みである。海洋ごみの7割が川に由来すると言われており、身近な川でどのくらいのごみがあるかはよく分かっていない。そこで、昭和町校舎の南を流れる能登川用水路のごみの調査を行うことにした。目的は、ごみの調査と学生が環境について考える機会を作ることである。

□吉備の環アクション「里海未来へ」

山陽新聞社のプロジェクトの一つで、瀬戸内海のごみを削減し豊かな環境づくりを進める活動。2023年度、食品生命科学科は用水路ごみ回収活動で使用した道具の購入、講師料で援助頂いた。

□能登川用水路について

能登川用水路は、市街中心部を流れる西川からイオンモール岡山北側、昭和町校舎南側を流れ、笹ヶ瀬川に至る。現在の岡山市北区島田本町出身の児童文学作家坪田譲治（1890-1982）の作品の中にも取り上げられている。市街中心部にありながら自然が感じられる用水路である。

2. ごみ調査活動の実施方法

昭和町校舎1号館南側の能登川用水路に特注の金属製の棒を渡し、その棒に川底まで届く園芸用ネットを結束バンドで結び（図1）、川底のネットをおもり（砂利）を入れた土嚢袋で固定した。一週間ごとにネットに掛かったごみを回収し、何がどのくらいあるかを記録した。用水路を流れるごみは不衛生であるので、火ばさみ、必要によって手袋をして扱った。

ネットを2023年度は1回（秋）、2024年度は2回（春、秋）仕掛けた。日程は、表1の通りである。基本的にネットを張って1週間ごとにごみ回収を行った。秋と春に行ったのは、安全面から水量が増える夏水期は安全面から避けるように市役所から指導を受けたためである。

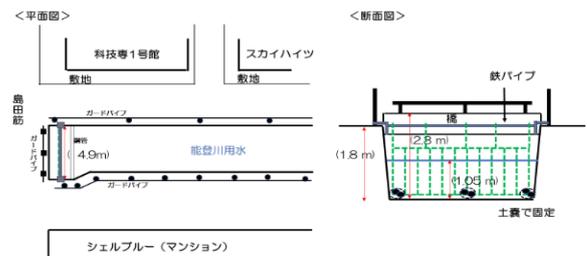


図1 ネットの仕掛け方

左：上から見た図 右：用水路断面図

実施時期	2023年度秋	2024年度春	2024年度秋
ネットを仕掛けた日	2023/10/10	2024/5/30	2024/10/28
ゴミ回収日①	2023/10/17	2024/6/6	2024/11/7
ゴミ回収日②	2023/10/24	2024/6/13	2024/11/11
ゴミ回収日③	2023/10/31		2024/11/18
ゴミ回収日④			2024/11/25
回収回数	合計3回	合計2回	合計4回

表1 ネットを仕掛けた日とごみを回収した日

回収したごみは、分別し、数と重さを記録した。活動は1年生の環境科学実習の時間で実施した。2023年度は1年生10名、2024年度は1年生2人の参加であった。活動では、水島の自然環境保護活動に携わっておられる「みずしま財団」の塩飽敏史理事より助言いただくとともに、海ごみについてもお話しいただいた。

3. 結果

2023年度は秋の実施であった(表1)。秋は夏場に繁殖した藻が枯れて流れてくる時期であり、1日でネットがたわむほどの大量の藻がネットに掛かった(写真1)。

藻が多すぎると、ごみ回収作業の邪魔になるとともに、ごみ回収ネットが切れて流される危険性があるため、可能な時は、レーキにより藻を回収した。写真1はネットを仕掛けて一週間後の第一回目(10/17)の回収時の様子である。

ごみは回収後、分別され種類と量が記録された(写真2)。ペットボトル、食品の包装の他、数としてはタバコが多かった。計3回ごみの回収を行いデータをまとめた(図2)。その他には、レジ袋や由来不明なプラスチック製品などが含まれる。



写真1 ネットに掛かった藻とごみ
左：回収直前の様子 右：引き上げた藻とごみ



写真2 回収したごみ

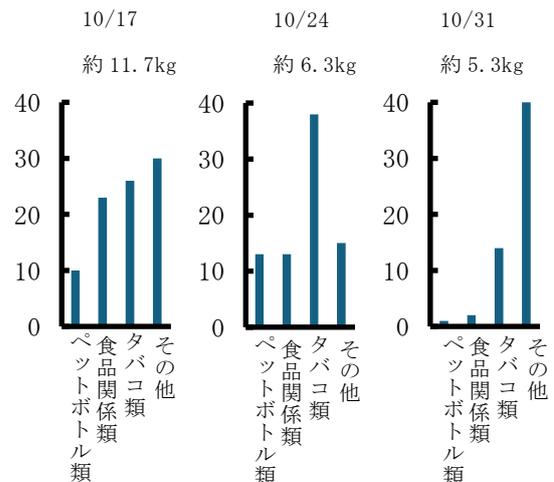


図2 2023年度秋に回収されたごみの種類と数
縦軸：個数 横軸：ごみの種類

この回収活動をクラス全員でポスターにまとめ、2024年2月の「海ごみ・プラごみ削減フォーラム」(岡山県主催)にてポスター発表した(写真3)。



写真3 ポスター発表の様子

吉備の環アクションによる助成は2023年度限りであったが、環境教育として2024年度も引き続きごみ調査活動を行った。2024年度では1年生2人が参加した。昨年度の経験を生かして、藻にもある程度耐えられるようにネットの設置方法を工夫した。また、ごみのカウント、分類方法を模索し変更した。回収したごみの種類と重量は以下の通りである(表2,3)。

表2 2024春のごみデータ

項目	6月6日		6月13日	
	重量(g)	重量(g)	重量(g)	重量(g)
可燃ごみ	ペットボトル	36	62	
	硬質プラ	48	50	
	袋・シート	900	900	
	発泡スチロール			
	布類	250		
	ゴム製品			
	紙・ダンボール	1300	300	
	自然物			
不燃ごみ	タバコ			
	ビン・陶器	276	234	
	缶類	71	113	
	金属類			
	家電製品			
	その他	3313	13	
計	6198	1670		

表3 2024秋のごみデータ

項目	11月7日	11月11日	11月18日	11月25日	
	重量(g)	重量(g)	重量(g)	重量(g)	
可燃ごみ	ペットボトル	409	600	146	88
	硬質プラ	232	77	70	146
	袋・シート	1259	232	784	565
	発泡スチロール		4	10	
	布類				1303
	ゴム製品	80	1		
	紙・ダンボール	312	65	215	
	自然物			385	65
不燃ごみ	タバコ				
	ビン・陶器			93	496
	缶類	56		400	140
	金属類				105
	家電製品				0
	その他	7276	765	321	427
計	9624	1744	2278	3335	

回収されたごみの週類と量は昨年度と似た傾向であった。タバコはその他に分類した。本数としては多かったが、重量としては軽かった。

4. 考察

<ごみの調査>

2023年度は、ごみの数でカウントした(図2)。タバコの数が多いごみの中で最も多かった。タバコ1本は小さいことから、目につきにくいですが、ポイ捨てしている人が多いことがうかがえる。逆にペットボトルはタバコと比較して大きいので目立つが、数としては、思っていたより少なかった。パンやお菓子などの包装も目立った。市街地での調査のため、ポイ捨てに由来するごみが多いと思われた。その他としては、黒い小さなビニル袋が10/17, 24, 31の全てで回収された。袋の中身を確認してはいな

いが、塩飽さん曰く、犬の排泄物ではないかということであった。犬の飼い主のほとんどは排泄物を適切に処理しているが、一部の飼い主により定期的に捨てられていることが推察された。ビニル袋に入れられたおむつらしきものも回収された。ごみ出しが面倒なものも一部の者により川に捨てられるのかもしれない。

ごみのカウント方法は、ごみにより大きさが違うことなどもあり、まだ試行錯誤の段階で、2024年度は、重量でカウントした。前年度もっとも数が多かったタバコはその他に含めた(表2,3)。タバコの吸い殻は道端に多くあるごみとしてのイメージが強いので、重さでなく数で示す方が、より実感がわくと思われた。ごみの量の傾向としては、2023年度と2024年度でカウント方法が異なるので一概には言えないが、活動体験から、大きな違いはないように思われた。ごみの量の傾向について知見を得るには、データの蓄積が必要である。藻については自然物であるが、ごみの調査では障害となった。藻に絡まったごみを取り出す手間がかかった。さらにはネットの破損の原因にもなりうる。藻の適切な管理が必要と思われた。

<学生のとりくみ>

本活動の目的の一つとしては、学生に環境について考える機会を作ることがあった。ネットを仕掛ける作業(写真4)では、誰かが用水路に入る必要があったが、自ら手を挙げる学生がいた。また回収活動においても、興味をもって取り組んでいる様子が見ええた。また、ごみをポイ捨てしてはいけないということを、活動中に互いに話していた。総じて学生は本活動でごみ回収に興味を持ち積極的に取り組んでいるように感じられた。



写真4 ネットを仕掛けている様子

毎回の活動は、みずしま財団の塩飽理事に技術的な面でご指導いただき、活動の最後には、ごみ問題についてお話しいただいた。ごみの捨てられた時期がいつごろなのかが、そのごみのデザインや消費期限の表示などから予測がつけられること、定期的に回収される同じごみは、同一人物が捨てている可能性が高いことなど、ごみから推測される様々な可能性を紹介していただいた。ごみの発生原因としては、ポイ捨てや不法投棄の他に、ごみ箱やごみステーションに適切に捨てたごみが風や雨で川に流されてくること（漏洩ごみ）もあることを教えていただいた。漏洩ごみへの対処は、行政、町内会と一般市民が協力して対策することが必要ではないかと考える。一方、不法投棄やポイ捨ては、ごみを捨てる人のモラルの問題が大きいと思われる。ごみ対策をするうえで、ごみの由来などよく考えて、何がより効果的な対策かについても考える機会だったと感じている。

5. おわりに

海ごみは世界的な問題となっている。環境省によると、令和5年度の推計値で日本から海洋に流出したプラスチックごみの量は、年間に11,000～27,000トンである。世界的には海ごみの量は年々増え続けており、2050年には、重量換算で世界の海のごみが魚を上回るとも言われている。プラスチックごみによる環境汚染の防止に向けて国際条約の合意を目指している

（釜山 R6. 11. 25-12. 1）。学生は今回のごみ回収活動を通して、世界的な課題である海ごみ問題を身近なところで実感した。学生が生きる将来の環境のために、学生自身が考え、ごみを環境に出さない行動をしていくことを期待している。

謝辞

- ・山陽新聞社 吉備の環アクションに参加させて援助頂きました。お礼申し上げます。
- ・みずしま財団 塩飽理事には、ごみ回収活動全般にわたり助言を頂きました。お礼申し上げます。

参考情報

山陽新聞 吉備の環アクション

<https://c.sanyonews.jp/kibinowa/satoumimirai/>

環境省 ごみデータ

<https://www.env.go.jp/content/000255552.pdf>

日本財団 ジャーナル

https://www.nippon-foundation.or.jp/journal/2019/20107/ocean_pollution

まちづくりデザインコンペティションの実施について

— 学生と町の人との接点の創出 —

建築工学科
秋山 紘

1. はじめに

このまちづくりデザインコンペティションは、学生と地域の人が協同し、イノベーションを生むきっかけとなることを目的として 2024 年度に計画したものである。具体的には、学生が地域と人と接点を持つこと、身近な町のことを考える機会となること、自分の考えを伝える場ができることに期待した。

奉還町商店街には、交流の場としてオレンジ色のベンチが設置してあるが、これをヒントに計画は立案された。誰でも気軽に使えるベンチが設置されることにより、街に新たな「ふれあい」と「やすらぎ」が生まれると考えた。

2. コンペの概要

課題地は「オレンジベンチ」が設置されている奉還町商店街(岡山市)である。タイトルは、奉還町店街の歴史、現状の様子から「商店街のやすらぎ」と設定した。参加校は、奉還町商店街の近隣にある岡山科学技術専門学校と岡山工業高等学校。参加学生は 17 名で、内訳は岡山科学技術専門学校が建築工学科 2 年のインテリア課題を専攻している 8 名、岡山工業高等学校が建築科 3 年の 9 名である。このコンペは、両校とも授業の一つのプログラムとして設定し、実施したものである。

3. 実施内容

(1) フィールドワーク (5月10日)

まずは現地を視察し意見を出し合って、作品のイメージをつかんだ。その後、各自、作品の制作に取り掛かった。

(2) 商店街と連携した作品への投票 (8月9日～17日)

商店街利用者に生徒や学生の作品に投票してもらうため、商店街の店舗にネット投票用 QR コードを記載したボードを設置した。

(3) 公開プレゼンテーション (8月18日)

審査員や一般の方を前に、国際交流センターで自らが考案した作品のプレゼンテーションを行った。

以下、上記 (1) ～ (3) について、詳しく見ていきたい。

(1) フィールドワーク

岡山科学技術専門学校建築工学科 2 年設計課題専攻の坪井さん、佐々木さん、町野さん、石原さんが運営を担当し、5月10日に以下のスケジュールで実施した。また、岡山工業高校生徒、岡山科学技術専門学校学生に加え、(有)フクシマ宅建西谷氏、KAKKY'S BAR 柿木氏、奉還町商店街振興組合 高崎氏、(一社)岡山県建築士会 日野氏、(一社)SGSG 右田氏が参加した。この活動の様子は、山陽新聞社 5月19日付朝刊に掲載された。

13:50—奉還町リブラへ集合。

13:50—コンペの主旨説明等

14:30—フィールドワーク (生徒、学生と商店街の人達が 4 つのグループに分かれ町歩き)。グループ分けは、両校が交ざり合う構成とした。生徒、学生と商店街の人、生徒と学生同士の交流が生まれる計画である。

15:30—再度、奉還町リブラへ集合し、グループ内で気づいたことをまとめ、発表。

学生が気づいた点（一部抜粋）

- ・鳥のマークが多い！道路と看板
- ・創業 170 年の種屋さん
- ・昔の外観をそのまま使用している店がある
- ・「トミヤ文具店」の看板を残して、新しい店も「TOMIYA」になっていた
- ・オレンジベンチがあった
- ・地元の高齢者の方が多く利用する喫茶店がある
- ・自転車屋の店主が良い人だった
- ・ベンチが少ない
- ・ベンチがボロボロ
- ・4丁目はアーケードがなくなる
- ・住宅と道の距離が近く窓越しの会話が生まれている



写真1 フィールドワークの様子



写真2 気づきを話し合っている様子



写真3 気づきを地図へ貼っている様子



写真4 発表をしている様子

（2）商店街と連携した作品への投票

8月9日～17日にネットを通じて商店街利用者に、作品への投票をしてもらうため、商店街の店舗に生徒や学生の作品とQRコードを記載したボードを設けた。商店街の各店舗には、岡山科学技術専門学校建築工学科2年設計課題専攻の坪井さん、佐々木さん、町野さんが足を運び、ボードの設置をお願いした。

投票は、グーグルフォームにアップロードした作品データを、QRコードを読み込んで行って頂いた。投票総数は56票だった。

投票用QRコード設置にご協力頂いた店舗

- ① おかやま信用金庫西奉還町支店
- ② アチェチェ
- ③ モリモト「メンズファッション」
- ④ タマゴ ハサミ屋
- ⑤ 加茂川 ふるさと交流プラザ
- ⑥ BABYLON

- ⑦ onsaya coffee
- ⑧ 巻き爪プラザ奉還町店
- ⑨ 奉還町ユースセンター verde
- ⑩ (一社)SGSG
- ⑪ ナカダヤ
- ⑫ IBUKI の野菜
- ⑬ MEDEL MUSIC
- ⑭ (有)フクシマ宅建
- ⑮ KAKKY'S BAR
- ⑯ (株)イールドインテリアプロダクツ

・QRコードによる投票結果

投票総数：56票

投票に添えられたコメント（一部抜粋）

- ・それぞれ個性があって悩みました
- ・独創性と交流を生みたいとの観点から選びました。大勢で座れること、また利用者同士の会話が生まれやすいデザインではないかと思いました
- ・素敵なベンチですね
- ・知らない人と共存する空間において、適切に間隔をあげながら、多くの人が休める形に魅力を感じ選択しました
- ・明るい色合いで、奉還町の光が差しているような雰囲気にとってもマッチしていると思いました



写真5 設置したボード

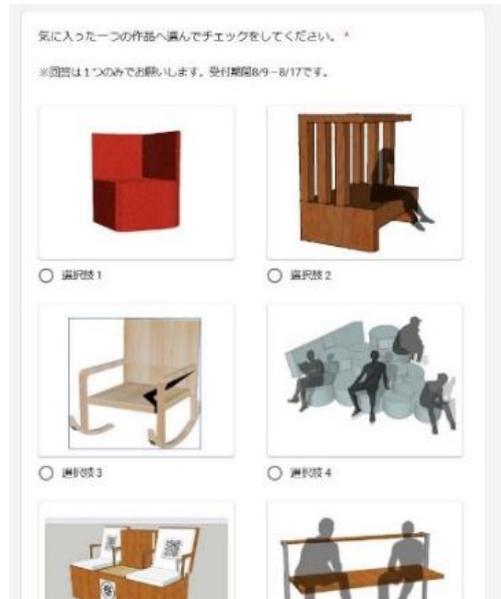


写真6 QRコードを読み込んだ際の投票画面



写真7 商店街の店舗へボード設置を依頼している様子

(3) 公開プレゼンテーション

8月18日に岡山国際交流センターで、以下の概要で実施した。運営は、岡山科学技術専門学校建築工学科2年設計課題専攻の坪井さん、佐々木さん、森本さん、岡山科学技術専門学校卒業生の河津さんが行った。

- ・主催：岡山科学技術専門学校
- ・協力：(協組)西奉還町商店会、奉還町商店街振興組合、(有)フクシマ宅建、(株)PANDAYA architecture、(一社)SGSG
- ・後援：(一社)岡山県建築士会

・参加者(発表順)

- 1 岡山科学技術専門学校 西村 光日颯
- 2 岡山科学技術専門学校 篠原 颯 (欠席)
- 3 岡山科学技術専門学校 林 貴良
- 4 岡山科学技術専門学校 増田 爽来 (欠席)
- 5 岡山工業高等学校 MiCHA'S
(広兼 みゆ、阿部 巧真、渡邊 優太、村岡 美咲)
- 6 岡山科学技術専門学校 山本 海星
- 7 岡山科学技術専門学校 徳常 壱砂
- 8 岡山科学技術専門学校 井堀 杏香
- 9 岡山科学技術専門学校 保志岩 亜弥
- 10 岡山工業高等学校 ベンチャーズ
(平田 叶大、占部 杏太郎、高見 海斗、小林 真大、石井 正人)

・審査物

パワーポイントを使用したプレゼンテーション
(各チーム5分+質問4分)。パネル(A1サイズ×1、
作品内容が伝わるものを掲載)会場に展示

・審査

プレゼンテーションとパネルを審査員により審査し、QRコードによる投票結果を加味し最終決定

・審査員

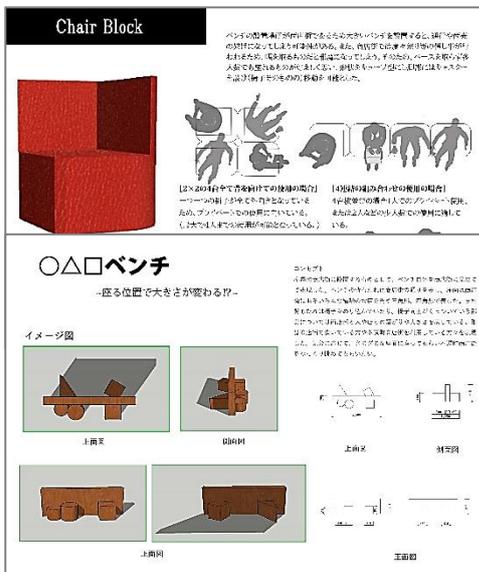
- (株)PANDAYA architecture 代表取締役 山縣 健太郎
(協組)西奉還町商店会 青年理事 犬飼 光晴
奉還町商店街振興組合事業推進部長 高崎 誠
(有)フクシマ宅建 代表取締役 岡田 将明
ライフプランr(株)代表取締役 東 正治
(一社)SGSG 理事長 野村 泰介

・受賞結果

最優秀賞には、岡山科学技術専門学校の西村 光日颯さんの「Chair Block」が選ばれた。シンプルなデザインや実用性などが高く評価された。

□最優秀賞

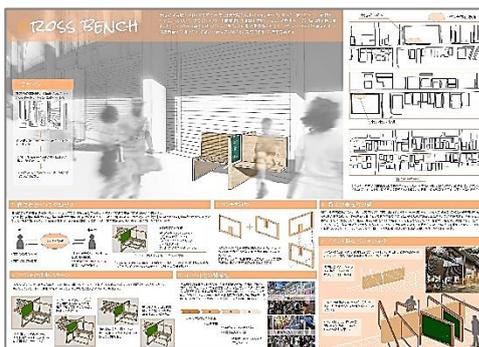
岡山科学技術専門学校 西村 光日颯



□西奉還町商店会賞
岡山科学技術専門学校 保志岩 亜弥
□奉還町商店街振興

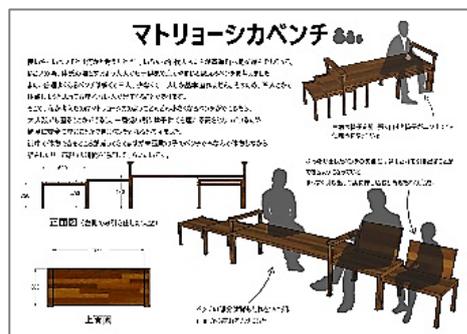
組合賞

岡山工業高等学校 ベンチャーズ



□フクシマ宅建賞
岡山科学技術専門学校 井堀 杏香

堀 杏香



□SGSG 賞

岡山工業高等学校 MiCHA'S



写真8 プレゼンテーションの様子



写真9 会場の様子



写真10 受賞式の様子

4. おわりに

今回のコンペにおいて、当初の目標であった学生と地域の人との接点、学生が身近な町のことを考える機会の創出は、ある程度達成できたと考える。例えばフィールドワークの後、学生たちが挙げた気づきの中に「自転車屋の店主が良い人だった」とあり、ここから商店街の方と触れ合った様子が見て取れる。「地元の高齢者の方が多く利用する喫茶店がある」といったコメントからは、町に目を向け観察していることがうかがえる。また、商店街の店舗にネット投票用 QR コード記載のボードを設置し多くの人に投票してもらえたことについては、地域の人と学生が繋がれた一端を示している。さらに、公開プレゼンテーションでは、学生がそれぞれ商店街のコンテクストを読み取り、作品へと落とし込んだものを発表していた。それらを商店街関係者でつくる審査員や、傍聴者に聞いてもらい講評を受けることで、このプロジェクトによる一つの解が得られたと考える。

そして、自分の考えを伝える場については、フィールドワークの発表と公開プレゼンテーションのみならず、制作段階の各場面においても学生間や学生と担当教員の間などで作り出せた。中でもプレゼンテーションでの発表は、どの学生も堂々としていて分かりやすいものであった。この場が創出できたことは、このコンペによる成果である。

ちなみに、最優秀賞に選ばれた西村さんの「Chair Block」などの作品が、2025年3月4日、奉還町商店街の一角に設置されたことを付け加えておきたい。

コンペに関わった人達における今後の生活において、町に関わる意識に変化が生まれていることを期待する。最後に、このコンペに参加した方、支援して下さった方々へ心より御礼申し上げたい。

イスラームの基礎知識

—ムスリム学生の理解のために—

日本語学科

太田 和宏

1. はじめに

2008年、政府は「留学生30万人計画」を策定した。これは2020年までに留学生を30万人受け入れるというものである。そして2019年、文部科学省は当初の計画より1年早く、留学生31万人の受け入れが達成されたと発表した。

その発表によると、中国・ベトナム・ネパール・韓国・台湾・スリランカ・インドネシア・ミャンマー・タイ・バングラデシュ・「その他の地域」の順で受け入れが多かった。そして「その他の地域」を除くと、アジアからの留学生が多く、その数は292,317人であったという。

本校でもおおよそ、これらアジアの国々からの留学生を受け入れている。この中でインドネシアとバングラデシュの留学生の多くは、イスラームを信仰する（インドネシアでは国の全人口の88%を、バングラデシュでは国の全人口の87%を占める）。将来、われわれは留学生としての彼らだけではなく、日本社会の一員としての彼らとも接していくことになるかもしれない。

本紀要では、彼らが信仰するイスラームとはどのようなものなのか——以下の3つ視点から見ていくことにしたい。

2. 一神教とは？

イスラームについて見ていくまえに、まず一神教について、ごく簡単に触れておきたい。ユダヤ教・キリスト教・イスラーム——この3つの宗教は一神教である。しかし、宗教ごとに異なる神（各宗教専用の神）が存在するのではない。ユダヤ教も、キリスト教も、イスラームも同じ一つの神（唯一絶対の神）を信じる。そのため、イスラームは、先に誕生したユダヤ教とキリスト教のどちらの聖典（聖書）も受け継い

でいる。

このことから、イスラームでは、ユダヤ教徒とキリスト教徒を同じ神から啓示された聖典を持つ者たち、すなわち“啓典の民”と呼ぶ。

3. イスラームについて

3.1 “イスラーム”とは？

“イスラーム”は宗教だけを指すものではない。それは法律や社会そして政治や経済など、われわれが想像する以上に広い範囲にわたる。したがって、ここでは「イスラム教」という言葉は使わず、“イスラーム”を使うことにする。

イスラームとは「神への絶対的服従」を意味する。そして、それを信仰する者を“ムスリム”と呼ぶ（女性は“ムスリマ”。どちらも「神への絶対的服従者」の意）。日本では「イスラム」と呼んでいるが、アラビア語の発音どおりに表記すれば“イスラーム”のほうが正確である。

3.2 預言者ムハンマド

610年、ムハンマドは“アッラー”（神）から啓示を受ける。彼はそのとき40歳、アラビア半島出身の商人だった。ムハンマドの故郷メッカ（正しくはマッカ）は当時、国際的な貿易地で商人たちは莫大な利益を得て裕福に暮らしていた。しかし、そこから生まれる貧富の差を彼は批判した。そしてアッラーの前での平等をとらえ、多神崇拝を否定する。当時のアラビア半島では、自然崇拝や各部族（当時、この地域には「国」というものがまだ存在せず、部族社会だった）の神々が信仰されていた。故に、彼らの神々を否定し、アッラーのみを信仰せよというムハンマドの主張は、当時の社会では受け入れがたいものであった。

メッカの有力者たちの迫害を受け、命の危険を感じたムハンマドは 622 年、メディナ（正しくは、マディーナ）へ移る。そして、イスラーム（宗教・法律・社会・政治・経済などを含む）共同体を築く。このメッカからメディナへの移住を“聖遷”という。アラビア語で“ヒジュラ”といい、「移住する」のほかに「きずなを断つ」という意味も持つ。ムハンマドに従い、ここに移住してきた者たちは自身が今まで属していた部族とのきずなを断ったからである。

630 年、ムハンマドはメッカを無血征服し、多神崇拝の神殿であるカアバ神殿をイスラームの聖殿とした。その 2 年後の 632 年、ムハンマドはこの世を去る。

3. 3 イスラームの現在

現在、世界のムスリム人口は約 19 億人（2020 年現在）いるといわれており、世界で 2 番目に信徒の多い宗教である（1 番目はキリスト教）。しかし近年、世界各国のムスリム人口は増加していて、将来、その順位が逆になるといわれている。

4. イスラームの教義と本校の留学生

4. 1 ムスリムは何を信じ、何を行う？

本校の日本語学科は、全学生数のうち 30%近くがムスリム（全員、バングラデシュ出身）である（2024 年 12 月現在）。彼らはイスラームの教えである“六信五行”に従って日々の生活を送る。

“六信”とはムスリムが必ず信じるべき 6 つのこと——“アッラー”“天使”“経典”“預言者”“来世”“天命”を指し、“五行”とは信仰生活で行うべき 5 つのこと——“信仰の告白”

“礼拝”“断食”“巡礼”“喜捨”を指す。

われわれがイスラームと聞くと、特に“五行”の礼拝と断食のことが頭に浮かぶだろう。この章ではムスリムの彼らの生活を知るために、五行を中心に見ていくことにする（“六信”に関しては、紙幅の都合で紹介のみにとどめる）。五行の最初に挙げられる“信仰の告白”とは

《アッラーのほかに神はいない。ムハンマドはその使徒である》という聖句を信じ、イスラームを信仰していることを告白する行為をいう。

“礼拝”は 1 日 5 回、定められた時間に、定められた方法でメッカの方角に祈りを捧げることである。5 回の礼拝は次のとおりである。

- ・1 回目：日の出より前に捧げる祈り
- ・2 回目：午後の礼拝で、正午を過ぎた後に行う祈り。3 回目の礼拝のときまでに行う
- ・3 回目：2 回目の礼拝の終わりから日没になるまでの間に行う祈り
- ・4 回目：日没直後に行う祈り
- ・5 回目：就寝前に行う祈り

礼拝について学生たちに尋ねると、岡山ではメッカの方角は西、1 回目の礼拝は今の季節（冬。執筆当時）なら 5 時で、アルバイトが夜勤の学生は仕事の後で礼拝をするという。普段は 1 日 5 回の礼拝を自分の部屋で行なう。しかし、金曜日の 2 回目の礼拝は成人男性の場合、集団礼拝への参加が求められる。彼らは学校が長期休暇中、市内のモスク（正しくはマスジド。「ひれ伏すところ」の意）へ礼拝に行く。しかし、普段は本校の礼拝室を使うとのことだった。筆者は実際、彼らの礼拝の様子を遠くから見たことがある。全員同時に礼拝室には入れないため、外でシートなどを敷いて祈りを捧げる姿もあった。集団礼拝は 3 人以上集まれば成立する。



礼拝の手順

“断食”はヒジュラ暦（ムハンマドがメディナに聖遷〔ヒジュラ〕した西暦622年7月16日を「紀元1年1月1日」とする）の第9月に行われる。この月はムハンマドが啓示を受けた神聖な月である。心と体を清めるため、この期間中、日中の一切の飲食を断つ。ヒジュラ暦は太陰暦で、1年が354日である。われわれが使う太陽暦に比べ11日ばかり1年が短い。30年ごとに11日の閏日が入るため、季節と月が合わず、断食の期間が夏になったり冬になったりする場合がある。（ちなみに2024年の断食の期間をインターネットで調べてみると、3月10日から4月9日までであった）。

この暦は宗教的な行事にのみ使われ、日常生活では太陽暦が使用される。

なお、“断食”のことは“サウム”、断食の期間のことは“ラマダーン”という。ヒジュラ暦第9月はラマダーン月と呼ばれる。この月が終わると、ラマダーン明けの祭り（イード＝ル＝フィトル）が行われる。

“巡礼”とはメッカとその周辺の地域を巡ることで、ムスリムであれば一生に一度は参加することが望ましいとされる。巡礼を終えたムス

リムは“ハーッジ+名前”と呼ばれる。

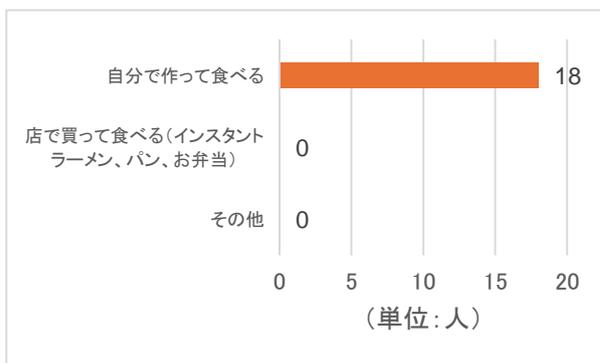
最後の“喜捨”は貧しい人たちへの施しを意味し、ムスリムの義務である。

このように、ムスリムは教義を実践することで自身の信仰を表す。故に、心の中で五行を行うという考え方をムスリムは持たないといえよう。

4. 2 食材は、いつもどうしている？

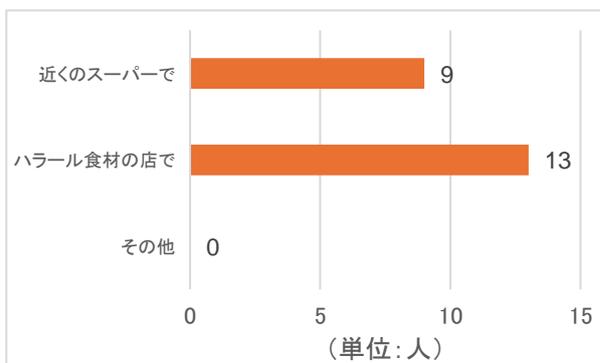
ムスリムである彼らが非イスラーム圏で生活する際に苦勞するのは、食事ではないだろうか。これについても、先ほどの礼拝と同様に聞き取りを行なった。協力してくれたのは18人で、質問とその回答は次のとおりである。

【質問1】食事は毎日どうしているか



この質問では、やはり宗教上の制約があり、全員が自炊していると答えた。

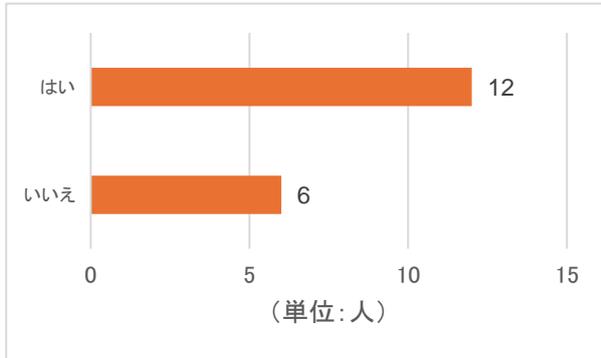
【質問2】食べ物はいつもどこで買っているか



この質問（複数回答可）では、9人が近くのスーパーで買うと答え、13人がハラール食材の店で買うと答えた。「スーパーで」と回答した

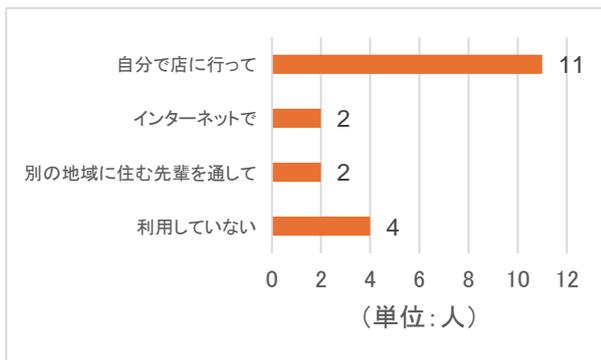
学生に尋ねたところ、野菜と魚はそこで買い、肉はハラール食材の店で買うとのことだった。

【質問 3】 岡山にハラール食材の店はあるか



岡山市内には、ハラール食材を売る店が複数ある。この質問で「はい」と回答した学生12人は、みな同じ店の名を挙げた。

【質問 4】 ハラール食材の店をどのように利用しているか



この質問（複数回答可）では、店が自宅から遠い学生は、店へ買いに行くほかに、インターネットの宅配サービスを利用することもあるとのことだった。また、ハラール食材の店は値段が高いので、別の地域に住んでいる先輩がハラール食材の店で一括購入したものから必要なものを買うと回答した学生もいた。

ここまで“ハラール”という言葉が何度か出てきた。ハラールとは「許された」という意味である。一方、「禁止された」は“ハラーム”という。豚肉を食べることや飲酒がこれに当たる。日本ではハラールを「ムスリムが口にしてもいい食材」という意味で理解している。しか

し、実際は倫理面や道德面などの幅広い範囲を指す。ここでは、食材についてのそれを見ることにしよう。

先ほど、学生たちへの聞き取りで「野菜と魚はスーパーで、肉はハラール食材の店で買う」という回答があった（→【質問 2】）。肉をハラール食材の店で買うのは、なぜだろうか。それは定められた方法でムスリムによって屠畜された肉しか口にできないからである。そのため、非ムスリムの日本人が屠畜した肉は、彼らにとってハラームの食材となる。このことは、イスラームの聖典『クルアーン』（日本語で多い表記は、コーラン）に《神はただおまえたちに、死骸と血と豚肉、および神以外の名によって屠られたものを禁じたもう。……》と書かれている（第2章 173 節）。

一方、魚については《海で漁獲し、またその獲物を食べることは、おまえたちに許されている。それは、おまえたち、および旅人たちのための食料である。……》（第5章 96 節）と書かれているため、スーパーで買っても構わないのである。

確かに食肉に関しては厳しい規定がある。しかし、あれもこれも口にしてはならないとクルアーンは書いていない。《言ってやれ、「私に啓示されたものの中には、死骸、流された血、あるいは豚肉、これは穢れであるが、あるいは神以外の名で屠られたけがらわしいもの、これらを除いては食べても禁制となるものはなにもない。……》（第6章 145 節）。

食物規定についてはユダヤ教のほうがより細かく、厳格である。詳しくはユダヤ教の聖書である『旧約聖書』（「旧約」という呼び方はキリスト教の立場からであるが）の申命記第13章 3～21 節をお読みいただきたい。

4. 3 ひげは生やさなければならない？

バングラデシュの学生には、ひげを生やした者が多くみられる。ムスリムの男性なら、ひげを生やすことが望ましいのだろうか。ひげについてクルアーンは言及していない。『ハディー

ス』(預言者ムハンマドの言行をまとめたもの)によれば、《イブン・ウマルは、預言者が次のように言ったと伝えている——多神教と違うようにしてください。あごのヒゲはそのままに〔伸ば〕して、鼻ヒゲは刈ってください……》とある。これを見ると、ムハンマドはあごひげを生やしていたようだ。ひげのことはクルアーンで触れていないことから、信仰のためというよりは習慣として、もともとアラビア半島にあったのではないだろうか。バングラデシュの場合も、もともと成人男性に、そのような習慣があり、彼らもそれにならっているのかもしれない。

しかし、日本で就職する際、彼らの多くが希望する職種——自動車や電気や機械関係、また介護関係(これは、まだ少数であるが)では、清潔感が重視されることが多いため、特に入社時、あるいは専門学校入学時にひげを剃ることを求められることがあるようだ。

5. おわりに

ムスリム留学生の増加により、彼らを受け入れる大学や専門学校でも礼拝室を設けたり、ハラルの学食を用意したり、健康診断ではムスリマのために女性の医師が対応したりしている。第1章でも述べたが、将来、われわれは留学生としての彼らだけではなく、日本社会の一員としての彼らとも接していくことになるだろうし、そのようになる日もそう遠くはないだろう。しかし、日本ではイスラームに関する知識がまだまだ乏しいのが実情である。イスラーム圏のニュースといえば、テロや紛争などに関するものが多く見られる。そのために「イスラーム＝暴力的」といった誤解や偏見を持ちかねない。しかし、このような今だからこそ、イスラームを正しく理解することが何よりも大切だと筆者は考える。本紀要がイスラームとそれを信仰する学生を理解するための一助となれば幸いである。最後に執筆にあたり、筆者の聞き取り調査に協力してくれた学生たちに、そして礼拝の方法などを丁寧に説明してくれた学生たちに深く感謝

する。

【主要参考文献およびURL】

蒲生礼一(1958)『イスラーム(回教)』岩波新書

菊池章太(2013)『ユダヤ教 キリスト教 イスラーム——一神教の連環を解く』ちくま新書

小杉 泰=編訳(2019)『ムハンマドのことは——ハディース』岩波文庫

小村明子(2019)『日本のイスラーム 歴史・宗教・文化を読み解く』朝日新聞出版

東長 靖(1996)『イスラームのとらえ方』世界史リブレット⑮ 山川出版社

長沢栄治=監修(2021)『13歳からのイスラーム』かもがわ出版

藤本勝次=責任編集(1970)『コーラン』世界の名著15 中央公論社

フィフィ(2018)『日本人に知ってほしいイスラームのこと』祥伝社新書

文部科学省「留学生30万人計画」骨子検証結果報告

https://www.mext.go.jp/content/20220914-mxt_gakushi02-000025000_1.pdf

Pew Research Center “The Future of the Global Muslim Population”

<https://www.pewresearch.org/religion/2011/01/27/the-future-of-the-global-muslim-population/>

【図版出典】

大川周明(2008)『回教概論』ちくま学芸文庫

注記：記述内容は可能な限り正確を期した